

書 評

須長史生著

『ハゲを生きる—外見と男らしさの社会学』

三 浦 欽 也

「ハゲ」は多くの男性にとって、良かれ悪しかれ「重大な関心事」である。しかし「ハゲ」は、男性の加齢による外見の変化としてはきわめてありふれているにもかかわらず、他の変化——例えば「白髪」や「しわ」に比べても、特に大きな関心を払われているように見えるのは何故だろうか。本書では、その疑問に対する答えの一端が示されているように思う。

本書は、1996年度に、著者が東京都立大学社会科学研究所に提出した修士論文「外見とく人格のテスト」——『ハゲ』についてのジェンダー論的考察」に加筆修正したものである。したがって、一般的な書籍にくらべると、いささか堅い印象はあるが、決して難解な文章ではなく、明快で理解しやすい文章である。実際、まったく専門外の書評子でも興味深く読み進むことが出来た。

著者は、本書の出版時点（1999年）では、東京都立大学の博士課程に在学となっているが、本書が多くの書評で取り上げられたりしたこともあり、その後、化粧品会社の機関誌やその他の出版物で、積極的に発言をされているようである。

本書の目的は「『ハゲ』という現象を取り上げ、男性と外見の関係性についてジェンダー論的に考察すること」（はじめに、p. ii、ll. 5-6）となっている。なお、著者も言明している通り、ここでいう「ハゲ」とは、男性の加齢によるもの（若ハゲを含む）に限定されており、女性や子供は対象からはずされている。また、対象範囲も現代日本に限定されている。

本書の構成は、全体が6章からなっている。第1章は、問題提起である。第2章には「ハゲ」経験者へのインタビューが、後の章における考察の資料として、編集の上、掲載されている。第3章では、「ハゲ」の認知がすぐれて社会的な現象であることが示され、第4章では男性性に関する先行研究の知見を批判的に継承する形で「ハゲ」経験の考察が展開されている。第5章では、「ハゲ」経験のなかでも、特に男性同士の間で生ずるからかいに焦点をあて、その社会的な構造と機能について、ひとつのモデルを提示している。第6章では、それまでの考察を整理し、男性性に関する先行研究において主要なテーマであった「男らしさの鎧」について、批判的な検討がなされている。

以下、本書の構成にしたがって、若干のコメントを付して行く。

第1章では、「ハゲ」経験が、社会関係を成立・維持させるための自己提示の障害になるという観点から、「ハゲ」現象を社会学的に研究する意義が述べられる。この章において、従来の「ハゲ」に関する議論の多くが、最終的に「気にするな・堂々とせよ」という精神論（＝「素朴なポジ・ハゲ論」）に帰結することに、疑問が呈される。この精神論が、「ハゲ」経験者にさらなる抑圧を強いているという指摘とあわせて、この指摘は意義深いものであると感じられる。

第2章のインタビューは、ハゲた男性の親睦団体の多大な協力のもとに行なわれている。団体とは無関係に行なわれたインタビューも含まれてはいるが、著者も認識している通り、サンプルとしては、いささかかたよりがある。しかしながら、ことの性質上仕方がない面も確かにあり、地道に資料を収集する姿勢は好感が持てる。

第3章では、人（自己または他者）が人を「ハゲ」と認知するのは、何らかの客観的な基準にもとづくのではないということを示し、当人の「ハゲ」を意識した行動（隠蔽行動やことさらに明るく振舞うことなど）と、他者の特別な行動（頭髪に関する不自然な印象に起因する、視線、言及、嘲笑、からかいなど）が相互に作用し、相互の「ハゲ」の認知に多大な影響を与えていることが

指摘される。特に、他者が「ハゲ」を認知する時に、単に髪の毛が少ないということだけではなく、「当人が『ハゲ』を意識した行動を取っている」という（誤認識も含めた）認識が、大きく影響しているという指摘は、新しい視点を提示していると思う。ただ、自己の「ハゲ」の認知に関して言及される「心情の揺れ」については、十分な考究がなされなかった感があるのは否めない。

第4章では、男性性に関する先行研究にふれ、とりわけ、男性性の呪縛やこだわりが、男性同士の相互行為と密接に結びついているという見方に注目している。その上で「ハゲ」経験の要素として、老いの認識、「ハゲると女性にもてない」という信念、可視性・有徴性によって攻撃を受けやすくなること、の3点をあげている。このうちの「ハゲると女性にもてない」という信念は、根拠を問われずに存在し続けており、いわばフィクションであるにもかかわらず、男性同士のやりとりの中で維持され、からかいに根拠を与えるなどの働きをしているという考察には、なかなか鋭いものを感じる。「ハゲ」の可視性・有徴性がひきおこす攻撃が、やはり男性からのものが主であるという点も考え合わせると、「ハゲ」問題の多くは男性同士の相互行為に起因するということになる。これは、これまでの常識とかなり隔たっているように感じられるが、妥当な考察であるようにも思われる。

第5章では、第4章での考察を受けて、主に男性が（ハゲた）男性をからかうことの構造と機能について考察している。著者は、からかう側もからかわれる側も、「<堂々とする>価値観」を共有しているとし、「からかい」についての先行研究を援用して、「ハゲ」をからかうことが親密性の確認と同時に、その者が（「ハゲ」であるにもかかわらず）<堂々と>しているかどうかという「人格のテスト」を兼ねているという見解に達している。さらに著者は、からかわれた者が、その「人格のテスト」にパスすることは、男性性の再確認であり、「自己の存在証明」ともなるということを指摘している。ここにいたって、男性がなぜにかくも「ハゲ」にこだわるのか、また、「ハゲ」をからかわれた者が、無視することができずに、なぜにかくも困惑するのかが明らかにされる。

このような「からかう者」と「からかわれる者」の間の、ある種の共犯関係のようなものは、書評子には思いもよらないものであったが、妙に納得できる帰結であった。

最終章では、第4章までの考察を整理し、「人格のテスト」は、テストされる側のみならず、テストする側（からかう側）も、相手を攻撃するという行為によって、自己の男性性を再確認しているということが指摘される。

著者は、「ハゲ」現象を分析するにあたり、「ハゲ」経験者へのインタビューや、「ハゲ」経験を綴った作文集・エッセイを資料として、「ハゲ」経験があるがままにとらえようとしている。従来の「単純でわかりやすい図式」にあてはめること——「おしゃれ」や「女性に対するアピール」といった問題に還元することは、極力避けている。この態度は、きわめて妥当であるように思う。

また、一般的に「女性に対する男性」という視点でとらえられがちな男性性に、男性同士の関係という視点を持ち込んできたのは、よい着眼点であったように思われる。

一方、第4章では、「ハゲると女性にもてない」という信念の強化に、カツラや育毛剤などのような頭髪産業の宣伝の影響が言及されている（p. 146）が、考えて見ると、「〇〇は女性にもてない」「〇〇すると女性にもてない」という宣伝文句は、かなり多くの広告で散見される。本書の主旨からは外れるが、これらの現象と男性性との関わりも、興味深い問題かもしれない。

もっとも、ハゲ現象を「ジェンダー論的に考察」という立場については、当初、本書を読み始めた時点では、いささかの危惧を禁じえなかった。このような考察において、ジェンダー論の視点が不可欠であるのは当然であろうが、はじめからジェンダーの問題として扱うのでは、考察において何らかのバイアスがかかる可能性があると考えたからである。全体を通読して見て、実際にバイアスがかかっていたとまでは言いきれないが、ジェンダー論的でない視点も考慮に値するのではないかと思われるところもなくはなかった。確かに「ハゲる

と女性にもてない」という信念などは、男性性との密接な関わりが想像されるが、ハゲた男性をからかうことについては、男性性だけに注目するのが妥当かどうか検討の余地があるようにも思われる。「人格のテスト」は男性性のテストかもしれないが、ハゲた男性をからかうという行為が全てそれで説明されるわけでは、おそらくないだろうし、それ以外の要因ももう少し考えて見るべきではないだろうか。

とはいえ、全体を通して、本書はなかなか説得力のある議論を展開しているように思われる。専門家の意見はまた異なるのかもしれないが、書評子には十分に納得される内容であった。いわゆる女性学に比べて、男性学的な研究はまだまだ少ないように思われるし、ジェンダーとしての男性性に関する研究も決して多くはなく、提示される男性像も、豊かであるとは言い難い。本書は、そのような状況における男性性研究の貴重な一歩と位置付けられるのではないだろうか。

男性性研究が、今後より一層発展することを期待したい。

(勁草書房、1999年5月、210頁、本体1,700円+税)